令和５年度

# 自己点検・評価書
# (学校評価報告書)

附属高等学校池田校舎

1　附属高等学校池田校舎の現況

（1）　学校名

| |
|---|
| 大阪教育大学附属高等学校池田校舎 |

（2）　所在地

| |
|---|
| 大阪府池田市緑丘１－５－１ |

（3）　学級数・収容定員

| |
|---|
| １２学級(１学年４学級)　収容定員４８０人(１学級４０人) |

（4）　幼児・児童・生徒数

| |
|---|
| ４６３人(男子２２７人・女子２３６人) |

（5）　教職員数

| |
|---|
| 校長(併任)　１人，副校長　１人，主幹教諭　１人，指導教諭　１人，教諭　２６人(うち，臨時的雇用３人，再雇用職員１人)，非常勤講師　１４人<br>事務職員　３人(事務補佐員２人，臨時用務員(用務員)　１人 |

2　附属高等学校池田校舎の特徴

| |
|---|
| 本校は1956（昭和31）年４月に創設された。本校の特色は，60数年の歴史の中で培われた自由・自主・自律を尊ぶ校風のもとで生徒一人ひとりの個性を大切にしながら質の高い教育を行っていることにある。国際教育にも力を入れており，2004年１月にユネスコスクールに登録され，アジアや北欧の高校生とESDをテーマとした学びの交流を続けている。<br>2020年４月にWWLコンソーシアム構築支援事業の共同実施校に指定され，拠点校である平野校舎とともに，「Society5.0に向かう生徒と教員のための『学びの共同体』の構築」を目的として「データサイエンスに基づくイノベーティブなグローバル人材育成システムの開発」に取り組んでいる。「グローバル探究」や「データサイエンス基礎」，「イノベーティブシンキング」などの学校設定科目のカリキュラムと評価方法の開発等を行い，2022年からは毎年，高校生国際会議を開催して国内外の連携校の高校生・教員と探究活動の成果を通した交流と研修を行っている。<br>また，近年は生徒１人に１IDを付与するなど教育の情報化に積極的に取り組んでおり，令和３年度入学生からはBYADを開始し，ICT機器の活用場面を増やすことで，より一層の推進を図っている。<br>2022年３月にはSPSの認証を受け，学校安全に高校生が主体的に取り組む活動を推進している。 |

3　附属高等学校池田校舎の役割

| |
|---|
| （１）基礎学力を充実させる普通教育を行う。<br>（２）大学学部の学生の教育実習を指導する。<br>（３）教育研究校・教育実践校として教育研究を進める。 |

４　附属高等学校池田校舎の学校教育目標

ア）自由・自主・自律の精神に富み，個性豊かな生徒を育てる。

イ）知育・徳育・体育の調和のとれた生徒を育てる。

ウ）国際性豊かで，平和を希求する生徒を育てる。

５　附属高等学校池田校舎の学校教育計画

ア）基本的生活習慣の確立をはかり，生きる力を育成する。

イ）学力の充実をはかり，主体的に学習する態度を育成する。

ウ）生徒の個性を尊重し，自己実現できる機会を与える。

６　附属高等学校池田校舎の令和５年度　重点目標(評価項目)，具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

| 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|---|---|---|---|
| A | 高いレベルで達成できた | A | とても適切である |
| B | 達成できた | B | おおむね適切である |
| C | 一部達成できなかった | C | あまり適切でない |
| D | ほとんど達成できなかった | D | 適切でない |
| | | E | 判定できない |

| | |
|---|---|
| 学校教育目標 | ア）自由・自主・自律の精神に富み，個性豊かな生徒を育てる。<br>イ）知育・徳育・体育の調和のとれた生徒を育てる。<br>ウ）国際性豊かで，平和を希求する生徒を育てる。 |
| 学校教育計画 | ア）基本的生活習慣の確立をはかり，生きる力を育成する。<br>イ）学力の充実をはかり，主体的に学習する態度を育成する。<br>ウ）生徒の個性を尊重し，自己実現できる機会を与える。 |

| 本年度の重点目標<br>(評価項目) | 具体的な取組内容<br>(評価指標) | 自己点検評価 | | | 学校関係者評価 | | 学校関係者評価を<br>踏まえた改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 達成状況 | 改善点 | 評価 | 意見・理由 | 評価 | |
| （1）グローバル化した社会で課題解決に向けてイノベーティブに思考し、主体的に実践できる力を育成するためのカリキュラムを連携機関と協働して開発し、広く発信する。 | ①WWLの学校設定科目「グローバル探究Ⅰ，Ⅱ」,「イノベーティブシンキング」,「データサイエンス基礎」,「データサイエンス」等を実施する。 | 「グローバル探究Ⅰ，Ⅱ」は，その成果を高校生国際会議などで外部発表し，一定の評価を得た。「同Ⅲ」を履修した３名は探究の成果を自らの進路実現に結びつけた。「イノベーティブシンキング」選択者20名，「データサイエンス」選択者17名は皆，意欲的に取り組んだ。 | 「グローバル探究Ⅲ」を履修させることの意義が，生徒・教員にまだ浸透していない。履修した生徒が１名であった。総合型推薦を利用する生徒は増加しているので，履修する生徒の増加につなげたい。 | A | 国公立大学において総合型選抜を実施する大学が増加している。グローバル探究の活動が活きているのは良いことである。 | A | 探究活動では外部への成果発表を通じて得られる学びもある。外部での発表をする生徒が増加しており，更に取り組んでいきたい。また，総合型推薦での進路実現を目指す生徒をサポートしていきたい。 |
| | ②高校生国際会議を大阪教育大学，平野校舎，連携校と協力して実施する。 | 高校生国際会議を対面で実施し，高校生同士の交流を深めることができた。海外連携校からの参加もあり，ポスター発表や口頭発表，シンポジウムなどを通して，多くの生徒が国際会議を体験することができた。 | 第一部（池田，平野），第二部（全大会）と分け，第一部（池田）では，交流校のサンダン高校の来日に合わせ実施，海外・国内連携校からはオンライン参加。次年度以降の自走に向け検討が必要。 | A | 国際会議のワークショップや分科会への参加は高校生にとって良い経験になる。海外の高校生・留学生と英語で議論する機会を増やすことが大切だろう。 | A | WWL事業の終了にともない，高校生国際会議の自走に向けて，どのように実施していくのか再度検討する必要があるので，大教大，平野校舎とも連携し進めて行きたい。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （1）グローバル化した社会で課題解決に向けてイノベーティブに思考し、主体的に実践できる力を育成するためのカリキュラムを連携機関と協働して開発し、広く発信する。 | ③海外研修として「ベトナム研修」や「カナダ研修」を実施する。 | 「ベトナム研修」はハノイ大学の教員・大学生の協力を得て，20名，教員2名で7月22日～30日に実施した。「カナダ研修」は23名，教員２名で7月25日～8月3日に実施する。 | 「ベトナム」研修はWWL事業修了にともない終了とする。海外渡航の費用が非常に高騰しており課題となっている。 | A | カナダ研修の日程が夏になり良い季節に行け良かった。参加者は女子が多い。男子の参加も促して欲しい。予定になかったリトアニア研修が３月に実施されるとのこと安全に実施して欲しい。 | A | 男子の参加も促していきたい。課題としては，渡航費用が高騰しておりこれまでと同様には実施できなくなってきている。行先の変更やプログラムの変更も考えながら実施していきたい。 |
| | ③アセスメントグループにPROG-HテストやAARテストの結果を提供することで，資質・能力の評価方法の研究開発に取り組む。 | 大阪教育大学の仲矢教授らのアセスメントグループが各種テストや調査を分析した結果，WWL事業に積極的に参加した生徒の方が3年間での資質・能力の伸びが大きいことが確認された。 | PROG-HテストやAARテストの結果を生徒自身の自己理解や，学級担任の生徒理解に活用できるようにする。 | A | 評価指標の開発・研究によって，取り組みの成果が定量的に評価できるようになったのは良い。<br>分析の結果がカリキュラムの開発と指導方法の改善に生かされることを期待する。 | A | 生徒のPGOG-HテストとAARテストの評価結果を生徒へ共有して，学びの深化につなげていくように指導していきたい。 |
| （2）ユネスコスクール（ASPnet）として、国内外の学校と持続発展教育（ESD）や多文化理解の協同実践に努めることを基盤に置き、国際教育を推進する。 | ①海外のASPnet校と交流を深める。 | 今年度は韓国サンダン高校が10月29日～11月2日，生徒12名，教員2名が来校。数年ぶり対面交流となった。また，3月25日～31日にリトアニアを訪問し，ジャミナ高校と交流。 | 交流のノウハウが，教職員・生徒ともに継承できておらず，一からの交流立ち上げの意識で取り組んだ。サンダン高校の教員・生徒ともに非常に好評価であった。 | A | 韓国の高校生が日本語，本校の生徒が韓国語を話ながら交流していたとのことで，英語のみならず外国語を学ぶよいきっかけとなっている。リトアニア研修もよい取り組みである。 | A | 次年度はサンダン高校を訪問する計画である。長年のユネスコスクール同士のつながりを大切にし，共通の課題について，互いの考え方の違いや共通点について親近感を持って知る機会にしたい。 |
| | ②ユネスコスクールとして，大阪・関西ASPnetの活動に貢献する。 | 「近畿・北陸地域ASPnet校・SDGs関連団体によるESD/SDGs学びあい交流会（3回のワークショップ）」に1年生2名，2年生2名が参加した | 学校外での学びの成果を校内で共有する方法・機会を考える必要がある。 | B | 学校外の様々な立場の人と共通のテーマで交流できたことは大変良い。<br>学んだ成果を他の生徒にも還元して欲しい。 | B | 大阪・関西ユネスコスクール（ASPnet）ネットワーク主催の学びあいの機会を，本校の教育活動に関連付ける方策を検討する。 |
| | | | | | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （3）セーフティー・プロモーション・スクール（SPS）認証校として、学校安全推進センターと連携しながら、安全教育、安全管理、安全連携について研究と実践を行う。 | ①学校安全管理マニュアル等の見直しや研修を通して教職員の安全意識の向上を図る。 | 不審者侵入の3段階チェック体制の構築をし，「事故発生時対応マニュアル」に反映した。<br>上履きを靴に変える教職員も増え，教職員の防災・防犯に対する意識は向上している。 | 役割分担上，事故発生時の緊急通報や，家庭連絡の役割を経験できる教員数が限られている。役割分担の在り方を見直す必要がある。 | A | 中高合同で防災訓練したことは有意義である。今後も連携を進めて欲しい。上位資格の応急手当普及員が12-13名いることは取り組み成果だと思うので，今後も救命講習や各種訓練を行い，学校安全の充実に取り組んで欲しい。 | A | 実効性のあるものにするために，学校安全マニュアルの改訂を怠らないようにする。附属池田小・中学校との連携を深め，共同で避難訓練等を行うようにする。<br>各種の緊急対応時におけるICTの活用方法を検討する。 |
| | ②SPSサポーター制度を活用して，高校生の学校安全への主体的な参加を促す。 | 安全点検を教員と生徒で行うことや，SPSサポーターが防災・防犯訓練の企画に参画することなどを通じて，生徒の学校安全への意識は少し変化した。ヒヤリハットシステムの運用にも参加。また，3階窓に落下防止用の窓ストッパーを設置した。 | 生徒の学校評価では教育環境の安全面に対する評価が低い。次年度は2，3階窓に落下防止用の窓ストッパーと転落防止柵の設置を推し進める。 | A | 生徒が学校安全の推進に主体的に参加するのは大変良い。行事や部活動以外の場面での防災や防犯，交通安全などについて関心を高めることは難しいかもしれないが，ぜひ定着させて欲しい。 | A | SPSサポーターとなった生徒が防犯・防災訓練などで中心となって活動する中で，学校安全に対して意識が高まり，様々な提案をできるようになってきている。それを活用することで更に生徒の意識を高めていく。 |
| | ③数少ない高校でのSPS認証校としての役割を果たす。 | SPS認証を目指す学校への情報提供や実践事例の紹介の機会として，文部科学省委託（株）社会安全研究所「学校安全実践力向上セミナー」での実践報告や大阪府教育センター首席研修「学校における危機管理」の講師受託など外部への発信を積極的に行った。 | 今年は主にSPS認証に向けての取り組み事例を発表したが，これからはSPSの「7つの指標」に基づき評価・改善している状況の報告が求められることから，今後も継続的なSPS活動の実践が必要である。 | A | SPS認証校になって，学校安全が進むと同時に，外部に発信する機会が増えたことは素晴らしい。PTAや地域とも協力が進むようにして欲しい。 | A | 対外的な発信とともに，SPS認証の普及にも取り組んでいくことが求められている。次年度は継続申請も控えており滞りなく進めて行く。 |
| （4）生徒一人一人の個性を伸長し主体性，協働性，創造性を育むために，教科外の活動を含む全ての学習機会を通じて，個人及び集団としての在り方を考えさせる指導を充実させる。 | ①生徒会行事について，健康・安全を最優先としつつ，過去の経験を生かして，実施可能な案を計画・実施させる。 | コロナ禍前の日常に戻した附高祭の実施となった。GoogleformなどICTを活用した，参加申込制度を導入して一般公開を実施した。熱中症対策として，看護師を配置して備えた。 | 附高祭では，熱中症対策が極めて重要である。今年度は天気が曇りで気温がそれ程上昇しなかった。根本的解決ができていない。 | A | 生徒会行事や防犯・防災訓練などで生徒が自主的に活動する場面でICTを有効に活用しておりコロナ禍を挟んで学校生活が大きく変容したように感じる。生徒が詳しくなる反動で，ICTに絡むトラブルが心配である。 | A | ICTのシステムに絡むようなトラブルは今のところない。ただ，SNSの使い方における問題が何件か発生している。生徒の自主自律による活動では，教職員の負担が大きくなるので，そのバランスをどうとるかが課題となっている。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （4）生徒一人一人の個性を伸長し主体性，協働性，創造性を育むために，教科外の活動を含む全ての学習機会を通じて，個人及び集団としての在り方を考えさせる指導を充実させる。 | ②研修合宿（1年），修学旅行（2年）について，旅行委員を中心に企画・運営させる | 研修合宿で新入生には相互理解を深める良い機会となった。修学旅行を10月に実施したが，好天に恵まれ，健康・安全に全ての行程を実施できた。 | 働き方改革により，宿泊行事中の勤務時間について，改めて教職員・管理職で確認する必要がある。 | A | 宿泊行事は生徒にとって大切な経験となるので，安全に実施できて良かった。以前にも増して先生方の負担が大きいと思うが継続して欲しい。 | A | 宿泊行事の準備，実施を通して，旅行委員の指導力等を育むことや，生徒同士が互いに尊重し，協力し合う姿勢が養えるよう，適切に指導する。 |
| | | | | | | | |
| （5）探究的な学習活動に必要な多面的な情報活用能力を育成するために、図書館の利用を含めた様々な方策について研究と研修を行い、その成果を広く発信する。 | ①教育活動におけるICTの一層の活用に向けて，授業等での活用方法の研究と校内での普及活動を行う。 | 1，2年生が各自のクロームブックを授業や様々な教育活動に活用するようになった。また，感染症等で登校できない生徒に対しても，各教員がGoogle Meetで授業を配信することが日常のこととして定着した。 | 教育活動におけるICT活用は生徒・教員とも一定の水準に達している。<br>病気療養中の生徒へオンライン参加できるように配信を行った。 | A | コロナ禍後の教育活動では，従来の対面授業とともに，これまでに培ったオンライン授業も併用していくことになると思う。これまでの知見を活かして，効果的なオンライン教育にも取り組んで欲しい。 | A | これまでは学力保障という意味でオンライン授業を取り入れてきたが，今後は単位認定も含め，日常の中にオンライン授業が必要となってくる。長期欠席の生徒への配信なども可能となってくるので，より取りこぼさない教育を進めて行きたい。 |
| | ②教育活動に必要なICT機器や施設・設備の充実を図る。 | WWL事業の推進や，感染症対策としてのオンライン授業充実のために購入したICT機器類を有効利用するため，メディアセンターのメディア工房にそれらを集約して保管し，教職員に利用の仕方などについて周知した。<br>生徒の読書量を増やすため，電子図書館の利用について，生徒に繰り返し周知を図った。 | 教職員が私用するPCが不足している。必要十分な数を確保するよう予算化する必要がある。<br>また，生徒の読書離れ防止の観点から電子図書を導入したが，利用者が少なく，廃止の方向で検討する。 | B | PC等が年月とともに性能劣化などで使用に耐えなくなっているのであれば，予算を確保して購入を検討して欲しい。電子図書の導入が生徒の読書離れに効果が無かったのは残念である。 | B | 情報機器もPC，タブレット，chrome端末など多様化している。優先度をつけ教職員にいきわたるように予算確保して進めて行く。 |
| | | | | | | | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （6）池田地区小中学校とともに、国際的見地から解決が必要な教育課題に取り組み、公教育の将来像を切り拓く拠点となることをめざす。 | ①小中との連携を図り，共通テーマのもと，高校のサブテーマを設定して公開授業を実施する。今年は各校独自開催で公開授業と協議会を行い，他校種の授業を積極的に見学して，相互理解を深める。 | 共通テーマ「グローバル社会を協働的に創造する資質・能力の育成―グローバル市民性が育つ学びをつくる―」のもと，高校は「他者と相互に影響しあいながら、一人ひとりが成長する学びの実現」をサブテーマに，数学，英語，公民で授業を公開し，協議会を行った。特に，保健体育＋公民で教科横断（文理融合）の研究授業を実施した。 | 一般見学者も多数あり，協議会でも有意義な意見交換ができた。附属池田小・中学校の教員も多数授業見学に来られた。<br>今回の相互交流を次年度以降にどのように生かすかが課題である。 | A | 校種をまたがった相互授業見学など，小中高の研究における交流が進んできたことはよいことである。今回高校の研究授業で，教科横断の研究授業を発信されたが，そのような取り組みを更に発展させて欲しい。 | A | 池田地区附属学校3校が共通したテーマで教育に取り組み，研究会で外部に対して発信できた。研究発表を未だ経験したことのない教職員から優先的に取り組んでもらう。 |
| | ②池田地区附属3校が連携して児童生徒にどのような資質・能力を育もうとしているのかをスクールポリシーと関連づけてまとめる。<br>また，それと関連させて，小中，中高の間での連絡入試の在り方についても検討する。 | 池田地区3校のスクールポリシーを相互に確認し，各校の特色や育もうとする資質・能力を「安全教育」と「国際教育」を柱としてまとめ，3校での継続性・発展性を概念図にまとめた。<br>これらを踏まえて，各校管理職，主幹教諭，研究部長，教務部長を構成員として，池田地区の将来構想について議論を始めた。 | 小中高の連携は進んできている。「こどもたち」の12年間の学びとして捉え，教育研究を進める方向で一致してきている。今後，小→中，中→高への接続として，連絡入試のあり方が焦点（課題）となってくる。 | B | 中学からの連絡進学利用率が6-7年前はほぼ100%だったのに，現在では80%くらいに落ちてきている。なぜ落ちてきているのかを分析して，中学から安心して高校へ連絡進学できるように魅力のある高校つくりが必要。 | B | 池田地区の強みとして小中高連携しつつ，12年間の学びで育成したい生徒像を明確化していく。池田地区の将来構想の中で小→中，中→高への連絡進学のあり方を議論していく。 |
| | | | | | | | |